
軍人高校の秦の話～キミを守るために俺はいる～

芳奈揚羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軍人高校の秦の話〜キミを守るために俺はいる〜

【Nコード】

N9190X

【作者名】

芳奈揚羽

【あらすじ】

2050年、日本は世界で唯一『才能測定器』を開発し、実質世界のトップに立っていた。

個人の持つ『才能』、それを数値化し、その人間に一番適した職業へ就かせることにより、政治、工業、化学、etc・・・全てにおいて今までの効率をはるかに上回る成果を上げることになったのである。

軍人高校へ通う『香坂秦』は、ある日二人の少女が空中戦を繰り広げている場面に遭遇してしまう。

一人が殺されそうになったのを助けてしまったことで、彼の運命は大きく変わってしまうのだった。
『それでも、俺はキミを守る』

第1話 秦が見た不思議な光景

2036年、世界は今まで経験したことの無いレベルの大不況に見舞われた。

原因はいくつもあり、それぞれが複雑に絡み合っていて、それらを取り除き世界が危機から脱するのには数十年かかるとさえいわれていた。

だが、ここで大きな動きを見せた国がある。
小さな島国、日本である。

この国にはある一人の科学者が居た。

その科学者の研究によって、日本はいち早く不況を脱し、そして2050年現在世界のトップに立っている。

その科学者の名前は本田達也^{ほんだたつや}。

彼が発明したものは『才能測定器』と呼ばれており、未だに日本以外で開発に成功した国は存在しない。

現在この装置は、各国が喉から手が出るほど欲しがっているものである。

この国では5歳の誕生日に国の指定の場所で『才能測定』を受けることが義務化されている。

『才能測定』とは、本田達也博士が開発した『才能測定器』で子供の才能を測定する行為である。

才能測定器とは、対象者の脳に直接ありとあらゆる状況の映像、音声を流すことで、その子供の脳が何にどのような対応、対処したかを判断し、どのような仕事、職種に向いた才能を持っているのかを、数値化することが出来る装置である。

それを元に国が用意した専門学校に通わせ、その道のスペシャリストを作り上げるのである。

既に前時代的な小中高の学校制度はなくなっており、才能を伸ばすのに必要な分野だけを徹底的に教える学校しか存在していない。ただし、これは日本独自の制度であり、他の国では実現していない。

才能を数値化する技術は、日本独自の技術であり、他の国では実装されていないからである。

「・・・って言われてもなー。」

閑静な住宅街、その一室で、仮想スクリーンを投げ出しベッドに飛び込んだ男子がいた。

国立軍人養成第一高校1年『香坂秦』16歳である。

現在、明日のテストに向けて勉強中のハズなのだが・・・

「あいつらが気になって勉強進まない。走りこみでもいつてくるか・

・・・」

仰向けになりながら右手を上げ、目の前に翳^{かざ}して見る。

（そう、あいつらみたいに俺も空を自由に飛んで見たい）

秦は、昨日見た光景を思い出していた。

その日、秦はいつものように早朝から走りこみをしていた。

軍人系の学校に通うものにとつて体力は必須、これが無ければ生き残ることは出来ないからである。

昔、この国が才能測定器の力によって大不況を脱した直後、お隣の大国から宣戦布告をされた。

狙いは才能測定器そのもの、もしくはその技術、情報だった。

だが、そのときには既に遅かったのである。

政治、軍事、科学、その他全てが本当に才能有る者の主導で動いていたからである。

物資では確実に上回っているはずの大国は、その実国民の質とい

う面では大きく負けていたのである。

戦争は短期間で決着し、各国は日本の力を認めざるを得なくなつた。

しかし、そのことから更にこの装置を欲しがる国が増え、サイバー攻撃や、武力行使に訴える国も増えてしまった。

だから、いざというときのために秦は走りこんでいたのである。

「ん、何だ・・・？」

走りながら未だ薄暗い空を見上げた秦の目に、何かが映りこんだ。黒い影のようなものが二つ、どんどんこちらに近づいてくるのだ。

「鳥、いや違うな・・・。」

鳥ではない、それくらいは影の形を見ればわかる。

（もつと複雑な、そう、人間のようなものに見えた）

影たちは交差しては離れを繰り返しながらどんどん山の方へ遠ざかっていく。

（気になる・・・）

妙な胸騒ぎを感じて、秦は意識の中にあるスイッチのようなものを押し込んだ。

（デバイス起動、視覚補助、超望遠モード）

今彼が起動したのは生体融合型『インタラプト・チップ』である。メールやネットだけではなく、装備者の身体能力の強化、思考加速までこなし、身体には全く悪影響が出ない、日本の科学の結晶。

一部の天才だけではなく、全ての国民が自身に最も適した教育を受け、職に就く、ただそれだけでこれだけの進歩が可能になるというのか。

（何だ・・・？やっぱり人に見える・・・？）

視力を強化した秦の瞳に映るのは、やはり人のような姿だった。

残念ながら視力を最大まで上げてみても、そこまでのことしかわからない。

（戦っている・・・？）

そう、なぜかはわからないが、両者は戦闘中に見える。

（くそ、益々気になる。外国のスパイとか、そういうのかも知れないし、行つて見るか・・・？）

どうやら、秦は『好奇心は猫をも殺す』という諺ことわざを知らないようだ。

（脚力補助、視覚補助、思考加速、同時起動）

そして、彼は時速60km程のスピードで走り始めた。

視覚補助は、目標を見失わないためと、前方の障害物などをすばやく発見するためである。

彼は時々出現する車や早起きの子供などを、スイスイと避けながら追いかけていった。

（たしかこのへんに・・・）

どうやらあの二つの影は、戦っているということらしい。

先ほど、もつれ合いながら山頂辺りに墜落するのが見えた。

決して小さくは無い山だが、秦は十分で山頂付近までたどり着いた。

音を出さないように、慎重に歩く。

その時、ガギ、ギギギと金属の擦れ合うような音が聞こえた。

（こつちか）

秦は音の聞こえた方向へ歩き出した。

（ここだ）

この先で何者かが戦闘を行っている。

秦は、慎重に草を掻き分け、顔を出して見た。

すると・・・

「はああ!!」

「甘いわよ!」

二人の女の子が、木の枝の上を跳ね回りながら、長さ1メートルほどの長剣で切りあっていた。

(・・・妖精・・・・・・?)

秦がそう考えてしまったのも無理はない。

一人は白と赤でカラーリングされ、体にピッタリと張り付いた服を、もう一人は黒と青のこれまたピッタリと体に張り付いた服を着ている。

白と赤のほうは腰まである茶髪のパニーテールで、切れ長の瞳が特徴的な背の高い女性。

そして黒と青のほうは、黒髪を肩口で適当に切っており、ボーイッシュな感じが印象的な女性。

二人とも、タイプは違うが十人に聞けば十人が美人と答えるだろう。

そして、二人の背中には二対の翼のような形のスラスターが付いていて、その姿はまるで・・・

(羽のついたプ。グ・スーツ・・・・・・?)

何十年も前に放映され、未だに根強い人気を保つあるアニメのスイツのようだった。

(凄いな・・・)

秦は目の前の光景に圧倒されてしまっていた。

二人は、背中のスラスターを小刻みに起動し、枝に飛び移りながらの超高速戦闘を続けている。

その気になれば空中戦も出来るだろうが、木が密集していることでそれは自殺行為なのだろう。

実際、空で行っていた戦闘はかなりスピードが出ていた。

そのかわり、慣性の問題であまり細かな動きが出来ていなかった
感がある、今はこの判断が正解だろう。

（しかし、個人の空中戦闘装備なんて開発されていたか・・・？）
これでも秦は軍事関係への才能が特別に高い、つまりエリートで
ある。

それでいて努力は怠らない、自他共に認める軍事の天才で、学校
側からの信頼も非常に厚い。

だから、開発されたばかりの『軍事用インタラプト・チップ』を
優先的にまわしてもらえたのだ。

その彼が知らない空中戦闘装備など、本来ならあるはずがないの
だが・・・

（だが、現に彼女たちは持っている。これは事実だ。）

軍人に大切なのは現状を正しく把握し、臨機応変に対応する力で
ある。

秦は自分の中の疑問を振り払い、目の前の戦いに注目することに
した。

「く・・・！！」

「そろそろ撃墜おちなさいされなさいよ！」

「あんたこそ！！！！」

（どうやら、ポニテのほうが押してるっぽいな）

ポニテの長剣が短髪のスーツをかする度に、バチバチと火花が飛
び散る。

既に短髪のほうは満身創痍まんしんそういで、言葉では強がっているが、急所へ
の攻撃を防ぐので精一杯のようだ。

相手もそれがわかつているのだろう、更に攻撃を激しくした。

「う、く・・・！きゃあ！」

攻撃を受けた拍子に枝に乗せていた足を滑らせ、短髪は背の高い
木の上から落ちた。

「これで、終わり！！！！」

ポニテが止めを刺そうと急降下してきた。

短髪は、ぎゅっと目を瞑り・・・

「ごめん、ね。私、負けちゃった・・・」

その目から、一滴の涙が零れ落ちたその時・・・

「そこまでだ。」

短髪を抱きとめ、急降下していたポニテを右腕一本で止めた男がいた。

「やばい！」

ほとんど反射的な行動だった。

短髪が落ち、ポニテが急降下を開始したその瞬間、秦の脳裏には短髪が長剣で串刺しにされる光景が浮かんだ。

『軍人とは殺す者ではなく守るものだ』、これが彼の心情である。自分の大切なものを守るために行動するのが軍人であり、秦にとつての大事なものは、日本であり国民であり、人間である。

要するに、誰も殺したくない、殺させたくないという子供の我侭わがままなのだが、彼はこれを実現するだけの實力を持っている。

だから、行動した。

目の前で命が消える瞬間を見たくは無かった。

（脚力強化、腕力強化、思考加速、部分硬化、同時起動）

一秒にも満たない時間で体を強化し、隠れていた茂みから踊り出す。

落ちてきた短髪を左手で受け止め、同時にポニテの長剣を右手で受ける。

強化した腕力で剣を止め、手のひらを硬化させることでダメージを防いだ。

そして告げる。

「そこまでだ。」

「な………!」

ポニテと短髪の驚きは当然のものだろう。

短髪は死を覚悟していたし、ポニテは必殺を確信していた。

そこに突然横槍を入れられ、しかもその男は長剣を右手一本で受け止めたのだから。

「え……え………?」

短髪は自分の身に何が起きたのかをいまいち把握していないらしく、秦の顔をぼけつと見ている。

「……アンタ、何者………?」

一方ポニテは、スラスターを起動し、長剣ごと秦から距離をとった。

秦も長剣を奪う気はないので特に抵抗しないで手を離れたのだが、「国立軍人養成第一高校一年、香坂秦。君達の戦闘を見て興味が沸いたので見学していた。本当は手を出すつもりはなかったんだが、人が死ぬのを見るのは嫌なので介入させてもらった。」

秦が丁寧に自己紹介すると、まさか答えが返ってくるとは思わなかったのだろう、ポニテは口を開けて彼を見つめた。

「………軍校か……。やっかいなのに見つかったね。」

悪いんだけど、見られたからには生かして返すわけにはいかないんだ。」

ポニテのその言葉に

「に、逃げて！私が時間を稼ぐわ!」

短髪が慌てて対応しようとする、がしかし

「悪いが、逃げるのはあなたのほうだ。あなたたちが何者なのかは知らないが、女の子を囷にして逃げるのは性に合わない。それに、もう自己紹介もしてしまったし、逃げてもあなたが負ければ俺のところに来るのは時間の問題だろう?」

恐らくこういうことになるだろうと思って自己紹介までしたのだ、

ここで逃げる選択肢なんて無い。

秦が自己紹介をしたのは、逃げない言い訳のためなのだから。

「な・・・アンタ・・・・・・・・・・」

短髪にもそれがわかったのだろっ、絶句していた。

「わかつたらどいてくれ。どの道、そんなフラフラじゃ戦えないだろ。」

抱えていた短髪を近くの木の幹に下ろし、彼は言った。

「む、無理よ！あなたじゃ魔空騎士まくうきしには敵わない！今すぐ逃げなさい！」

「魔空騎士、ねえ・・・」

ポニテは二人のやり取りをじっと見つめていた。

「待っててくれるなんて、優しいんだな。」

短髪の抗議を無視することに決めた秦が、ポニテに近づく。

「まあ、後ろから切るなんて、騎士として絶対してはいけないことだからね。正々堂々と敵を倒す、これが私たちの誇りだから。」

「そうか。」

話しながら、彼女を観察する。

（隙は全く無いな。さっきまでの戦いで相当消耗してるはずだけど・

・・）

秦が見た限り、短髪とポニテの間にそこまで大きな実力差は無かった。

短髪があそこまで消耗しているのだから、彼女もかなり疲労しているはず。

秦が聞いたことも無い武装をしている相手だ、こちらは少しズルイ戦い方をして相手を更に疲れさせるべきだろう。

（視覚補助、腕力強化、脚力強化、部分硬化、思考加速、同時起動）
「じゃあ、そろそろ準備はいい？いくわよ！」

戦いの火蓋が、切って落とされた。

第2話 戦闘開始

ポニテは、障害物を避けながら突っ込んできた。

（どうやら、こちらは一気に勝負を決める気のような）

しかし、それも当然といえるだろう。

秦の予想道理ならば、彼女も先ほどまでの戦いで随分と体力を消耗しているはず、無駄な小競り合いで更に体力を消耗するよりも、持ち前のスピードで一撃で片をつけたいだろう。

（だが、予想道理だ）

秦は足下の土を力の限り踏み込み、相手の目の前につま先で蹴りだした。

ドンと地面が揺れ、土が盛り上がる。

通常ならば目潰しにしかない、だが、秦の強化された脚力ですればどうなるか・・・

「きゃー!!!」

既に目潰しなどではない、超高スピードでコンクリートの壁に突っ込むようなものだ。

ポニテが土の壁にぶつかった瞬間、秦は身を捻り、直線上から退避する。

（どうだ？）

ポニテは後ろに生えていた木に正面衝突した。

普通ならば、かなりのダメージを受けるだろう、ましてや、生身なのだから、戦闘不能になってもおかしくはないのだが・・・。

「く・・・甘く見すぎていたわね。流星軍高の生徒・・・。」

（やっぱりか・・・）

「くっ・・・!」

土煙の中から出てきたポニテには、ダメージらしいダメージはないように見えた。

と言っても、秦はこれも予想してはいたのだが・・・

（生身の人間が、あのスピードで空を飛べるわけが無い）

更に、先ほどの戦闘でも、長剣を受けた部分に火花が飛び散った
りしていた。

恐らく、何らかのフィールド、バリアのようなものが張られている
のだろう。

ポニテは警戒のレベルを引き上げたようで、再び秦から距離をと
る。

（だが、これからどうするか）

となれば、攻撃手段は限られてくる。

（物理攻撃は効かない）

あのタイミングでの土の壁は、ぶつかった本人にしてみたらトラ
ックに撥ねられるような衝撃だったはず。

あれ以上の物理ダメージを繰り出すことは、今の秦には不可能だ。

（せめて、武装があれば違ったが・・・）

しかし、そんなものは持ってきていない。

秦は早朝ランニングの最中だったのだ、学校以外での武装の所持、
使用は原則として認められていない。

秦は未だ学生なのだから、そんなものを所持しているはずがない。

（しかし、まだ信じられない）

あれほどの衝撃を受けてダメージ無しの防御手段など、聞いたこ
ともない。

（飛行武装といい、このスーツといい、彼女たちは一体何者なんだ
？）

だんだんと好奇心が押さえきれなくなってきた彼（自分の感情を
操作出来ないところは彼が学生である故の甘さなのか）は、思い切

って聞いてみることにした。

「お前たちは何者だ・・・？」

「・・・さっき教えてもらったし、名乗らなきゃ騎士の恥よね・

・・・」

ポニテは一瞬躊躇したが、こちらを向き、左手を胸に当て、背を伸ばして答えた。

「日本国軍実験魔法部隊、通称『魔空騎士』。副隊長の『水神梓』です。」

彼女は胸ポケットから部隊章を取り出し、見せ付けながら言った。

その言葉に、秦は驚いた。

「日本国軍・・・！？それじゃあ、俺たちが争う意味なんてあるのか・・・？」

同じ日本国民で争う必要なんてあるのだろうか。

彼としては殺人をさせたく無かっただけで、『見られたから殺す』と言ってきたのは彼女のほうなのだ。

てつきり外国のスパイか何かだと思っただけに、これには驚かされた。

（しかし、実験『魔法』部隊・・・？）

魔法、とは昔から不思議な力だとされてきたアレのことだろうか・・・？

冗談か何かだとも思ったが、見せられた部隊章は間違いなく本物だ。

アレは日本の特殊な技術を使っているもので、複製などは出来るはずがない。

（つまり、日本は『魔法』を現実のものとして扱っている・・・？）
少なくとも日本軍は、この魔法とやらで実験部隊を作るくらいには信用しているということだ。

「まあ、不思議に思うのも無理ないわね。でも、実際に私たちがいるし、魔法は現実にある力なのよ。そして、これはまだトップシークレットなの。あなたが死ぬ理由はこれだけで十分よ。」

（なるほど、トップシークレットを知ったから殺すと・・・）

だが、今の情報は

（俺の勝ちが見えたな）

そのためには、もう少し情報を集めないといけないが。

「そっちの女の子は何だ？お前たちは同じ部隊なんじゃないのか？」

質問しながら意識の中のスイッチを押し込む。

秦の意識の一部が広大なネット空間へと落ちていく感覚。

（自宅の端末へアクセス）

勝利への一ピースを掴み取るために時間を稼ぐ。

「その子は裏切り者ですから。ある作戦への参加を拒否し、更にはターゲットを守ろうとしました。その上、この部隊を抜けるとまで言い出して・・・この国で私たちの居場所はここだけです。他のどこにも生きる場所はない。だから、せめて私の手で殺してあげたかった・・・。」

ちらりと後ろを見て見ると、短髪が悔しそうに、悲しそうに肩を震わせている。

「あなたも、法律の第129条は知っていますよね？」

2050年現在の第129条、それは・・・

「『自身の才能に合致した職業以外には就けない』、だったか・・・？」

自分の記憶を漁り、曖昧な答えを導き出す。

「大体あってます。私たちにはこの部隊しか無いんです。それを裏切るっていうことは、自ら死を選んだのと同じ。だから、私が・・・。」

つまり、他の『才能』がほとんど無いということ。

他の軍に入ろうとしても、部隊を裏切った人間を入隊させるころなど存在しないだろう。

更に、この部隊は日本のトップシークレットらしいし、それを抜けるということは確かに殺されても文句は言えない。

むしろ、この水神という女は他の人間に殺させるくらいなら、せめてこの手で、という気持ちで挑んだのだろう、話している最中も悲しげな表情だった。

（でも、どんな理由があっても俺の目の前で人殺しはさせない）
あと少して、そのための情報が揃う。

「あなたも運がありませんね。こんなところに来なければ立派な軍人になれたでしょうに。」

本当に悲しげに、彼女は長剣を構える。

「残念ですが、これで終わらせます。」

（来るか）

もう少して揃うというのに、彼女はもう無駄話に付き合う気はないようだ。

彼女の体が少し浮き上がる。

「行きます！！！」

そして、気が付いたときには目の前にいた。

「はや・・・！！！」

彼女は話の最中に微妙に位置を修正していたのだ。

先ほどのように障害物を避けながらではスピードが乗り切らない。だから、森の中で彼に一直線で攻撃できるポイントを探しだしたのだろう。

全速力で、最高の一撃を繰り出すために。

「うおおおおおおおお！！！！！」

秦が吼える。

（リミッターOFF!!!）

『リミッターOFF』、それは軍用の生体融合型『インタラプト・チップ』ならではの最終手段。

本来、人間の能力は七割が眠っているといわれている。

『リミッターOFF』は、この残り七割を強制的に引き出すコマンド。

使用者の体を破壊する可能性すらある、文字道理の最終手段なのだ。

水神の長剣の切っ先が秦の喉元に触れた、その瞬間・・・

「はああああああああ!!!」

秦はその切っ先を右手で掴み、そのまま体を左に旋回、彼女を投げ飛ばした。

「う、そ・・・?」

水神の狼狽した声を置き去りにし、秦は地面を蹴る。

大量の土が衝撃で後方に弾けとんだ。

「ああああああああああああ!!!」

「な・・・!？」

その瞬間、投げ飛ばされてまだ体制を立て直せない水神の目の前に、秦が出現した。

「ちよっと、おとなしくしてろ!」

左手を硬く握り・・・

（全力で、殴る!!!）

ビシ、ビシ、パキンという音の後、彼女は更に強く吹き飛ばさ

れ、背後にあった木に衝突し、止まった。

「が、．．．．．あつ．．．」

どうやら、ダメージは通ったようだ。

（リミッター、ON）

水神を無力化したと判断した秦が念じた瞬間、彼の体を感じたことの無いほどの痛みが走った。

「ああ．．．．．ぐつ．．．があああ．．．。」

体をくの字に曲げて痛みに絶える。

（よかった．．．．．重要な腱や神経が切れているわけじゃないな）

『インタラプト・チップ』の自己診断機能で自身の体の検査を終えた秦は、ホッと胸を撫で下ろした。

所々筋肉の断裂が見られるが、大きな損傷はない。

気になるのは部分硬化を使用せずに長剣を掴んだ右手だが、こちらの傷は骨までで止まっている。

いずれも、現代の医療ならば直ぐに直すことが可能なレベルの傷だ。

検査を終えた秦が水上を見ると、彼女は立ち上がろうとしていた。

「こんな、ところで．．．無能の烙印を押されるわけには、いかないのよ．．．！」

「無茶だ。体のいたるところの骨にヒビが入っているはずだ。下手なことをすると．．．。」

「五月蠅い！何もわからない学生風情が．．．．．あなたにはわからない、これしかないのよ私たちには！今の日本で生きていくには、ここしか無いのよ．．．！」

血反吐を吐きながら、それでも立ち上がろうとする。

「私を殺さないの？今しかチャンスは無いわよ。私が立ち上がる前

に殺さないなら、今度こそ私があなたを殺す・・・！」
「大した執念だ。だが、時間切れだな。」

「え・・・？」

「たった今、親父と連絡を取った。トップシークレット情報の秘匿義務は一時的に凍結される。つまり、俺を殺す理由が無くなったわけだ。」

短髪もポニテも、何を言っているのかわからないだろう、秦の顔をボケツと見ている。

「直ぐに命令が下るはずだ。」

言った直後、ポニテの表情が変わった。

恐らく、『インタラプト・チップ』を通じて視界に命令文が表示されたのだろう。

すなわち、『香坂秦を殺すな』という命令文が。

「・・・あなた、一体何者？」

化け物を見るような目で秦を見つめる水神。

「自己紹介はしたはずだが・・・？香坂秦、16歳。父親は『香坂勉』。日本国軍総司令だ。」

「な・・・。」

彼が時間稼ぎをしてまでやりたかったことは、ただ一つ、父親と連絡を取ることだった。

彼の父親は自分の『インタラプト・チップ』にかなり高度なセキュリティをかけていて、息子からのメールでさえ直ぐには閲覧しない。

息子の名を騙る^{かた}不届き者の可能性があるから、スキャンが完了す

るまでは見ない。

そして、秦はその待ち時間を利用して、自宅のホームサーバーから父親のデータベースにハッキングをしかけ、『魔空騎士』についての情報を取得、自分の危機的状況の証拠としてメールに添付したのである。

こうでもしなければ疑り深い父親のことだ、事実確認に時間をかけて、結局秦は殺されていただろう。

あのデータは、『実の父親のデータにハッキングするほど、今の自分は追い詰められている』という何よりの証拠になっただろう。

『もしもし、秦、大丈夫か！？』

その時、秦のチップを通じて彼の脳裏に父親の声が響いた。

「親父か、ありがとう。俺は無事だよ。」

『そうか……。よかった。』

明らかにホッとした父親の声に、秦は罪悪感を覚えた。

「悪かったな。」

『全くだ。俺を心配させるな。だが、女の子を助けるためだったらいいじゃないか。男としては、お前をほめてやりたい。』

「そのことで、一つ相談がある。」

『何だ？』

「短髪の罪を不問にしてやってくれないか？」

『！？』

周りで二人が驚いているようだが、無視した。

「無理か……？」

「短髪、というと、『南条朱里^{なんじょうあかり}』君だな？うん、いいぞ。今回は不問にしてやる。』

「本当か！？」

『今回だけの特別サービスだ。次は無いぞ。……元々、俺も反対

してた作戦だしな。』

「・・・そうなのか・・・？」

『詳しいことは、今度機会があれば教えてやる。とにかく、部隊のほうには俺から話を通してやるから安心しろ。』

「わかった。ありがとう。」

通話が切れると、秦は二人に向き直り

「というわけだ。南条朱里の罪は不問、これまでどおり部隊に居続けてくれ。」

『・・・。。。。。。』

二人は呆然と顔を見合わせて

「や、った・・・？ やった！ やった！ おめでとう朱里ちゃん！」

水神が南条に抱きついた。

「え・・・え・・・？」

「よかった。よかったよ・・・。」

どうやら南条には現状を認識する力が足りないらしく、水神ばかりが喜んでいる。

「ありがとう、ありがとう・・・！」

「いや、礼なら親父に言ってくれ。それじゃ、俺はもう行くわ。」

こういう場面に慣れていない秦は、赤い顔を隠しながら山を降りたのだった。

（しかたないだろ、あんな薄いスーツで美少女二人が抱き合ってたら誰だって・・・）

この先は想像しないであげるのが大人である。

秦だって、健全な男子高校生なのだから。

山を一人とぼとぼと降りた秦は、学校を休み近くの病院へと歩い

た。

そして、念のために一日検査入院をし、次の日の夜、やっと自宅へ帰ってきたのである。

だが・・・

「あ、明日テストだ・・・。」

しばらく勉強をしたが、全く頭に入っていない。

仮想スクリーンを投げ出し、ベッドに飛び込み、彼はこう呟いた。

「俺も、空を自由に飛んでみたいな・・・。」

彼が驚愕することになるのは、二日後のホームルームのときである・・・。。。

第2話 戦闘開始（後書き）

今回の話は今までと少し世界観を変えてみました。

それでもやっぱり魔法なんだな・・・とか言わないでください。
ファンタジーは私の生きがいですから！

今は魔法成分少ないですけどね、これから増える（予定）です。
科学と魔法が合わさった世界なので。

これからどうなるのでしょうか。

第3話 何故ここにいる！？

あの激闘から二日後、昨日のテストも無事に済ませ晴れやかな気持ちで登校した秦を出迎えたのは、大きな遠慮の無い声だった。

「おい、お前が休むなんて珍しいじゃんかよ秦！一体何があっただ？」

秦の友人の一人である『あつたしのぶ熱田忍』である。

背は秦と同じくらいだろう、髪は黒だが、緑と赤のオッドアイが特徴的な美少年だった。

彼も、そして秦も、遺伝子の情報を一部いじられている『コーディネイト・ベイビー』である。

確かに少数ではあるが、別に珍しくも無い。

『才能測定器』によって、人の才能とは脳を構成する遺伝子が大きく関わっていることが既に証明されている。

つまり、何かに特化した才能が必要とされるこの国で、わが子がいい仕事に就くためにはどうすればいいか、と考える親が、まだ母親の腹の中に居る状態で、子供の脳を構成する遺伝子を少し組み替えるのだ。

その結果生まれてくるのは、何か一つの才能に特化された子供であり、この国では重宝されることになる。

親なりに子供のことを考えた結果というものだ。

まあ、その影響で容姿にも変化が起きることがあるのだが。

この忍のように。

『倫理に反する』『子供の人権を守れ』などと言って『コーディネイト・ベイビー』を哀れむ、または憎む連中がいるが、秦にとつてそれはお節介以外の何者でもない。

確かに、そのことを恨んでいる人間はいるだろうが、彼は自分が誰かを守る力を、才能を持っていたことに感謝さえしているのだから。

恐らくは、昨日の二人も、『コーディネイト・ベイビー』ではないだろうか。

他の仕事に就くことが出来ないほど才能に偏りがあるのだ、その可能性が一番強いだろう。

「で、何があつたんだ？昨日はテスト前の最後の詰め込みで聞けなかったからな。今聞かせてもらうぜ？」

「すまん。教えることは出来ないんだ。察してくれ。」

その言葉で察したのだろう、忍は苦い顔をして、

「あー、また何か厄介ごとに首を突っ込んだんだろう……。それも、女の子関連の！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

この友人は、あの一言だけで全てを察したらしい。

（『察してくれ』とは言ったが、そこまで察して欲しかったわけでは無かつたんだが・・・）

今度は、秦が苦い顔をする番だった。

「ま、何をしたのかは置いておくが、お前の事件遭遇率は一体どうなってるんだ？」

「さあな、俺にはわからんが。」

実は、秦は昔からあの手の事件に巻き込まれる。

現在の日本の学校は全てエスカレーター式で、クラスもずっと秦と同じだった忍と、そしてもう一人の女の子は、『事件に巻き込ま

れた秦に巻き込まれる』ということがとても多かった。

・・・何故かことごとく美少女が関わっている事件ばかりなのだが。

それでも離れることが出来ないのが腐れ縁というもののなのか。

家も近いため、この三人は幼馴染としてずっと過ごしてきたのだ。

「あいつに比べると、また五月蠅いぜ？」

忍のいう『あいつ』とは、勿論もう一人の幼馴染『月影綺羅』のことである。

綺羅の席にはいないので、まだ学校に登校していないようだ。

「珍しいな。綺羅がこんなに遅いなんて。」

既にホームルームの五分前である。

普段ならば、とつくに登校しているはずなのだが・・・。

「ああ、綺羅なら朝、先生に呼ばれて職員室に行ったぜ。手伝って欲しいことがあるって。」

「そうなのか。」

よく見れば、綺羅の席の液晶は既に起動状態になっている（現在の日本の机には、タッチパネル式の画面がついていて、授業などではこれに入力する）。

（先生に呼ばれたのなら遅刻扱いにはならないだろう）

秦は内心ホッとしていた。

軍人高校に通う生徒としては、遅刻などは重大な違反だからである。

遅刻、欠席などをしたものには担任からいくつかのペナルティーが科せられるほどである。

昨日の秦の欠席も、本来なら懲罰対象なのだが、そこは父親が根回していたらしい。

『極秘の訓練のため』に欠席したことになっていて、お咎めは無

かった。

「しかし、先生がヘルプを求めるなんて、何があっただろうな？」
「確かに、普通じゃないな。」

この学校は『単独でも生き残る』をモットーとしている。
こういうと誤解を受けてしまうかもしれないが、要するに『自分のことは自分でやれ』ということである。

それは、教師といえども例外ではなく、『教師が生徒に手伝いを求める』のは、非常に珍しいことなのだ。

二人が話しているとホームルーム開始のチャイムが鳴り、担任の男教師が教室に入ってきた。

その後ろから綺羅もやってくる。
フワフワとした金髪を、短いツインテールにしている美少女である。

勿論『コーディネイト・ベイビー』で、この二人を前にすると『自分も『コーディネイト・ベイビー』なのに、何故自分の容姿は普通なのか・・・』と秦は落ち込むのだが、その、物静かな中に熱い闘志と正義感を秘めた秦にファンクラブが存在することを彼は知らない。

まあ、親友二人が面白がって隠しているということもあるのだが。

綺羅が席に着くと同時に、担任教師が話し始める。

「今日は挨拶の前に、連絡がある。」

その言葉を聞いて、秦と忍はほぼ同時に横の席の綺羅を見た。

つまり、『お前何か知ってるんじゃないのか?』という視線である。

それを受けた綺羅の返答は、『もう直ぐわかるよ。驚くと思う』。
視線だけで言葉を交わすことが出来るのも、長年一緒にいて、命
を懸けた戦いを何度も潜り抜けてきた幼馴染ならではの技である。

「今日からお前たちに仲間が加わることになった。」

（これは珍しい・・・）

クラスの仲間も忍も驚いている。

何故か綺羅からは『ドヤー・・・！』と聞こえた気がしたが、こ
れは気のせいだろう。

現在の日本で、転入生というのはとても珍しい。

ほぼ全ての学校が、小中高大のエスカレーター式だからである。

自分の才能を生かし、伸ばすだけが目的なので、レベルで分ける
必要がない。

いや、正確に言えば、小学校に入るときに、ほぼ同程度の才能を
持つもの同士が同じ学校に通うようにするので、その時にレベル分
けをしているのである。

才能が伸ばせない『落ちこぼれ』は、社会に組み込まれずに落ち
ていくだけ。

つまり、ずっと同じ人間たちと付き合っていくわけで、そのデメ
リットとして、人見知りになりやすい、というのがあると言われて
いるが、些細なことである。

このような理由があるため、転入生などは珍しく、転校には深い
理由があるだろうことは、皆が理解した。

転入生が来るにも関わらずシンと静まり返った教室（深い理由が
あるだろうから、軽々しく聞けないと思っているため）の自動ドア
が開き、二人の女性が現れた。

『・・・・・・・・・・！！』

先ほどとは別の意味で静寂が走る。

二人とも、文句のつけようが無い美少女だったからである。
だが、秦は別の意味で驚愕していた。

「始めまして。今日から皆さんと一緒に・・・」
「何でここにいる!？」

ガタツと音を立てて立ち上がるのはやはり秦だった。

「あ、秦さん！会えて嬉しいです!!!」

「秦、一昨日は^{おとこい}ありがとね！」

そう、一昨日の二人だった。

「おい、知り合いかもしれんが、先に自己紹介ぐらいさせてやれ。」
秦と二人との関係を勘ぐっていたクラスの喧騒を完全に無視して
担任が喋る。

「あ、はい。申し訳ありませんでした。」

敬礼をし（軍人学校共通の挨拶）、素直に着席する。

忍と綺羅から『後で話を聞かせろ』と聞こえてくる気がするが、
気のせいだ。

（気のせいだ）

自分に言い聞かせつつ、秦は自己紹介をしようとしている二人を
見つめる。

こちらを見ていた。

いや、見つめている。

勘違いの余地が無いほどに見つめている。

まるで、他人など存在しないかのように二人は秦だけを見つめて
いた。

（何だ・・・!?俺が何かしたのか・・・!?）

それが恋する乙女の眼差し、などとは考えられないのが彼が秦た
る^{ゆえん}所以である。

二人の気持ちに気が付いているのは、彼以外の全てのクラスメイ

ト（＋担任）なのだが、自分のファンクラブの存在にすら気が付かない朴念仁^{ぼくねんじん}なので仕方がないといえよう。

「あー・・・ごほん！二人とも、自己紹介を。秦とは後で見詰め合っ
てくれ。」

担任が促すと、二人は

「そうですよね。これから時間はたっぷりありますし。ね、朱里ちゃん。」

「うん。そうだね。先に自己紹介しちゃうか、梓ちゃん。」

と頷き、先に梓のほうが出た。

「水神梓^{みなかみあずさ}16歳です。趣味は裁縫、お料理、戦法は『ヒット・アンド・アウェイ』。他に、銃器の扱いなんかも専攻しています。これからよろしく願いますね。」

そこまで言うと後ろに下がり、代わりに朱里が前に出る。

「南条朱里^{なんじょうあかり}16歳、趣味は漫画とかゲームとか。戦法は近、中、遠距離を移動しつつ攻撃する『オール・ラウンド』だよ。それ以外の特技は無し。これからよろしくね。」

自己紹介で自分の得意戦法を教えるのは軍人学校ならではの光景といえるだろう、秦たちも昔やった記憶がある。

（何故だ・・・？親父が『魔空騎士』に居続けることが出来るようにしてくれたハズだ。何故、彼女たちはここにいる？それも、転入生という立場で）

もっとも、秦は考え事に夢中で全く聞いていなかったのだが。

一番聞いてもらいたかった相手は秦だろうに、彼女たちも運が無いというかなんというか。

その後、いくつかの質問を彼女たちは笑顔で全て却下し、よくわからない内にホームルームは終了した。

第3話 何故ここにいる！？（後書き）

やはりというか何と云うか、やっちゃいましたね。はい、転入生です。あの二人です。恋しちゃいました。何かお約束、テンプレですかね・・・。

しかし、4話からは少しずつ話が進んでいく、予定です。これからもよろしく願います。

第4話 修羅場

（俺が何をしたっていうんだ・・・）

秦はストレスからくる胃痛と戦っていた。

とにかく、周囲の視線が痛いのである。

ホームルームの後はそのまま授業が始まるので質問攻めには会わずにすんだが、今日一日、もしかしたら数日は追い回される可能性がある。

（確かに、転入生たちと知り合いだなんて俺でも聞きたくなる。珍しいからな）

これは単に『新たな美少女たち』が現れて秦に熱烈な視線を送っていたからなのだが、それに気付けないのが秦である。

彼には自分がモテるという自覚がこれっぽっちも存在しないのだから、当然なのだが。

一時間目の授業は現代文である。

余談だが、その人物の才能に必要な教育だけを施す現在の日本では、現代文と英語、歴史以外の授業は各学校によって違い、例えば軍校では、これ以外は全て運動系の授業になっている。

言葉は喋らなければならないし、歴史は知らなければならない、英語は話せると便利だ、だが、それ以外のものはどうだろう？

数学は？物理は？その他の専門的なものは、一つの分野にしか進まない、進むことが出来ないこの日本で必要だろうか？

現在この国で必要とされているのは、全てを平均的に出来る人間ではなく、たった一つに特化された人間なのだ。

その余計な授業時間を、別の必要な授業に回したほうがいい、と

というのが現在の日本の考え方である。

クラスメイトの視線に耐えながら（忍と綺羅の視線が一番痛い。梓と朱里の視線は熱い）秦は辛い時間を過ごした。

「じゃ、今日の授業はここまで。」

教師の声が聴こえた瞬間、

（デバイス起動、脚力強化）

一秒にも満たない僅かな時間で自己強化をした秦は、教室の扉に向かってダッシュした。

（後少し！）

「残念。そう来るだろうとは思ってたんだよね。」

「ぐっ……！」

しかし、忍に回りこまれてしまった。

「なら……！」

「しかし、こちらに既に封鎖済み。残念でした。大人しくお縄につきなさい。」

もう一方の扉も、既に綺羅によって封鎖済みであった。

三人の予想外な動きとその速さに、クラスメイトは啞然としている。

『インタラプト・チップ』による身体強化にも、個人差が存在する。

そもそも、『インタラプト・チップ』は人間の普段使っていない潜在能力の一部を引き出すもので、能力に個人差が有る以上、当然

のことなのだが。

そして、普通の『インタラプト・チップ』と軍用の『インタラプト・チップ』にも、能力的に大きな差が存在するのだ。

まず、軍用のものには、一般のチップには存在しない機能が複数存在すること。

これには、一昨日秦が父親のデータベースに使用した『ハッキング・ツール』も含まれる。

そして、ある意味一番大きな違いは、引き出す事の出来る潜在能力の量に制限、つまり、限界値が設定されていないところだろうか。これは、肉体への負担を度外視して限界まで強化出来ることを表している（このコマンドが『リミッターOFF』）。

普段の性能でも、一般のチップより遥かに大きな能力を引き出せるので、肉体をかなり鍛えていなければ反動で体が壊れる可能性だつてあるのだ。

そのため、このチップの所持、使用には免許が必要である。

『軍用』についてはいるが、軍人の中でもこの免許を持つものはそう多くはない。

つまり、この『インタラプト・チップ』を使うことを許可された人間は、既にエリート、と言っても遜色ないのだが……。

そのエリート三人が、こんな馬鹿げたことをしているのだから、啞然としても仕方ないだろう。

「くくく……。秦、もう逃げられないぜ。流石にこの状況ではいくらお前でも逃げられないだろう？」

（探せ、どこかにあるはずだ。逃げ道が）

秦は必死になって教室の間取りを思い出そうとする。

（あいつらの戦闘能力は俺とほぼ互角。二人相手では勝ち目がない。

つまり、扉以外でどこか逃げられる場所を探すしか・・・)

ギリギリと二人に追い詰められる秦。

そのとき・・・

「秦さんに新しい女の子が付いたって本当ですか!？」

忍が守っていた方の教室の扉を荒々しく開けて、女の子が飛び込んできた。

(勘弁してくれ・・・)

秦は頭を抱えなくなった。

背はあまり高くないが、腰辺りまで伸びる赤いロングヘア、燃えるような赤い瞳の美少女である。

名を『一条楓』^{いちじょうかえで}、半年ほど前にある事件に巻き込まれ、秦に救出された上級生である。

秦があまりにもかっこよく事件を解決し助け出したせいで彼に惚れた、ある意味で被害者の一人でもある。

「秦さんには私がいるの! 誰だか知らないけど、後から来て私の秦さんを盗ろうとしないでよ!」

教室中に響いたその声に、秦に抱きつこうと画策していた梓と朱里だけでなく、忍や綺羅までもが固まっている。

(今だ! !)

楓の言葉の内容を理解出来ていない秦だけが直ぐに動くことが出来た。

彼は開いていた教室の窓から身を乗り出すと、迷いなく飛び降りた。

「ちよ、ここ四階よ!？」

誰かの声が聴こえたが、関係ない。

(3、2、1、ここだ!)

つま先が地面に付いた瞬間に、膝を曲げ、両手を突き、衝撃を殺す。

そして、そのクラウチングスタートのような体勢から、校庭に向けて走り出した。

秦の強化された脚力によって、直ぐにどこに行ったのかわからなくなってしまった。

『かつこいい．．．．．』

この行動が、乙女の恋心を更に加速させることになるとは、秦は知る由もなかった．．．．．。

第4話 修羅場（後書き）

ええと、物語進みませんでしたね。すみません。
でも、まあゆっくりと進んでいこうかな。

焦りすぎて文章短くしても面白くないですよね！
これから頑張ります！

第5話 あんたって人は……

「一体、親父は何を考えているんだ……」

校庭の隅に生えている、大きな桜の木の下で小さく縮こまりながら秦は呟いた。

同時に吐いた溜息が、彼がどれほど疲弊しているかを如実に物語っているようだ。

自身の教室でクラスメイトと 一条楓 に囲まれ、必死に窓から脱出した彼だったが、ここで思いもよらぬ事態が発生した。

「何で、学校中が知っているんだよ……」

最初に逃げ込んだ学食、次に行った校舎裏、どこに逃げても質問攻めにあうのである。

教師にすら質問されたときには、衝動的に叫びたくなるほどだった。

だが、これも仕方がないことだと言えるかもしれない。

元々、香坂秦 は第一高校内で知名度が高いのだ。

日本国軍総司令 香坂勉 の一人息子であり、若干十六歳にして >> 事件の自由捜査権 << を持ち、既に国内外を問わず大きな事件をいくつも解決に導いている、本物のエリート。

学生でありながら、事件の自由捜査権を持っているのは、歴史上彼だけであろう。

軍人高校は、同時に警察学校でもある。

卒業生たちは、余程才能に偏りが無い場合は、軍人になるか警察になるかを選択することが出来るのだ。

なので、学生の中に軍人関係、警察関係、どちらの資格も自由に

取得することが出来るのだが、秦が真つ先に受けた試験は警察関係の資格の中では最難関、最高峰とも言われている>>国際事件自由捜査権限<<だった。

これはその名の通り、国内外を問わず事件を自由に捜査出来、その警察などを自由に動かせる権限で、現在日本の警察ですら所持しているのは彼を含めて五人のみである。

秦としては、昔からよく事件に巻き込まれ、その度に捜査で規制を受けてきたため、いい加減面倒になったから取得しただけなのだが。

積極的に事件に関わるつもりもないが、関わった事件を放っておくつもりもない。

それならば何の束縛も受けずに捜査出来る権限を持てばいいと思っただけなのだ。

彼の名誉の為に言っておくが、それで関わる事件が殆ど女性関係なのは、彼としては全く意識してのことではないのである。

話が逸れたが、第一高校内で有名な彼の前に、新たな美少女が二人、それも日本では珍しい転入生として現れたとあっては、学校中で話が広がるのも無理は無いということだ。

「兎に角、親父に連絡を取らないと・・・。。。」

日本軍の秘密特殊部隊であろう>>魔空騎士<<、その二人が転入生としてやって来るなど、尋常なことではない。

まず間違いなく彼の父親であり、日本国軍総司令でもある 香坂 勉 の命令、または許可がないと出来ないはずだ。

（流石に意味のある行動なんだよな。そうであってくれ・・・。。。）

彼の父親は、何というか、自分が楽しむためならばどんなことで

もしてしまう人間である。

以前、面白そうだからという理由で、自分の部下、つまり日本国軍所属の人間全てに、メイド服と執事服の着用を命じたことがある。男性にメイド服を、女性に執事服を、だが。

更に、その動画を電腦世界に流してしまい、秦が持ち前のハッキング技術で無数にダウンロードされたその映像を、消去して回ったのだ。

その後、父親を母親と二人でボコボコにし、家族全員で謝罪に回った。

これだけのことをしておいて未だ彼が総司令の地位なのは、ひとえにその能力の高さ故にである。

更に人望もあるのだから、息子である秦にさえ、未だに計り知れない人間なのだが。

（チップ起動。音声通信開始。）

>>インタラプト・チップ<<に記憶されている父親の番号を呼び出し、連絡を取ろうと試みる。

忙しい人間だが、賭けてみる価値はあるだろう。

というより、秦は今すぐに釈明の言葉を聴かなければ気が済まないというだけだったのだが。

メールなどでは恐らく無視されるだろうし、こうなったら出るまでかけ続けるつもりだった。

『おー、そろそろ連絡してくると思ってたぞ。』

だが、予想に反して父親は通話に応じた。

『どういうことだこれは。親父が仕組んだんだろう。』

『仕組んだとは人聞きの悪い。俺はただ、彼女たちがお前に会いたいつていうから親切心で転入の手続きまでしてやったのに。』

それを聞いて秦は額に右手を当てる。

（頭痛がしてきた）

『いやー、いいね美少女に囲まれての学校生活！俺もそんな青春を送りたかったぜー。』

「今の台詞、しっかり録音してるからな。母さんに聞かせてやる。」

『え、ちよつ待て、ちよつとま……』

ブツン、と一方的に通話を遮断し、更に父親を着信拒否にして、秦はもう一度深い溜息を吐いた。

これで父親の遊びだということが確定したからだ。

（母さんには後で親父の悪行を話して聴かせるとして……）
憐れ、勉 はボコボコにされる未来が確定してしまったようだ。
それが嫌で家に帰らないなどという選択をした場合はもっと過酷なお仕置きが待っているだろうし、どちらにしろ死亡確定だろう。

唯一の希望を打ち砕かれ、秦は頂垂れた。

その瞬間、次の授業開始五分前を告げるチャイムが鳴った。

「しょうがない。行くか……」

秦はトボトボと校舎へ向かって歩きだした。

二時間目が始まる……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9190x/>

軍人高校の秦の話～キミを守るために俺はいる～

2011年11月9日14時02分発行